

皆さま、こんにちは。
府中教会、アンドレアです。

キリスト教の終末の教えと言えば、私たちはすぐ、主による正義の裁きを連想するにちがいありません。本日の「福音」でも、タラントンを預けられた僕たちについて、主人の裁きのたとえが読まれます。私たちは「裁き」と言う時、厳しい罰のことを考えがちです。実は、主人に一タラントンを預かった僕もその通り考えてしまいました。彼は、主人の裁きを恐怖としてしか考えていません。実際、この僕は心の中に持っている自分なりの主人の悪いイメージで裁かれてしまいました。主人は「怠け者の悪い僕だ。わたしが蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることを知っていたのか」と、そのイメージ通りに答えたのです。

しかし裁きには、もちろん喜びの側面もあります。「福音」に登場する他の二人の僕は、主人から預かったタラントンを二倍にして主人に返しています。主人は彼らに、「忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ」と言われます。彼ら二人にとって、主人の清算は、恐れではなく、まさに喜びの機会になります。

それでは、皆さま、私たちは心の中で神様についてどんなイメージを持っているのか考えてみましょう。神様は、恐れるべき裁判官ですか、それとも愛している父親ですか。

